

# キャンプにおける水辺活動の価値

鹿屋体育大学 柳 敏晴

キーワード：キャンプ 水辺活動 価値

## I はじめに

地球は陸地より水域が多く、その72%が平均3,800mの深さの海水で覆われている「水球」と呼ぶのがふさわしい惑星である。

水は私たち人間が生きていくのに不可欠の物であり、本能的に引きつけられる魅力を持っている。殆どのキャンプ場は、何らかの形で水辺にあり、その周辺は色々のプログラムや、楽しく気持ちの良い場所を提供している。

キャンプの大半は暑い夏に行われており、涼しさを与える水辺活動は、キャンプの重要なプログラムの一つである。キャンププログラムについての研究はいくつかあるが、水辺活動についての物はほとんどない。キャンプにおける水辺活動は、海、川、湖沼池などの自然水域や、プールに代表される人工的水域があり、活動場所も、水際、水辺、水上、水中、水底と幅広い。また、プログラムも、砂浜での砂遊びやサンドクラフト、ビーチバレーや各種レクリエーション、水辺の遊びや観察、磯遊びや釣り、水泳やライフセービング、スキndaイビングやスクーバダイビング、サーフィンやボディーボード、ヨットやボードセイリング、カヌー、カヤックやローボート、水上スキーやモーターボートなど非常に幅広く多種目である。

北米のキャンプでは、水辺の活動を安全面のことも重要と考え、必ずウオーターフロントディレクター (Waterfront Director) という専門職を置いている。ウオーターフロントディレクターの役割は、技術指導はもちろん、安全指導、監督管理、指導者養成、プログラム環境の安全確認など幅広い。

本発表では、キャンプで行われている水辺活動の現状を述べ、水辺活動がキャンプにおいてどのような価値を持つのかを明らかにする。

## II キャンププログラム

組織キャンプの目的は、参加者個々人が全人的に成長することである。キャンププログラムは、キャンプの目的達成のための具体的な手段であり、方法である。参加者にとって、生活体験の全てがキャンププログラムである。参加者の成長の機会、キャンプ活動のあらゆる場面にある。水辺活動は、前述したように幅広く多様なので、キャンプの目的達成のためには、良いプログラムといえる。

## III 水辺活動

「水辺野外活動」梅田利兵衛・長谷川純三：監修によれば、「水辺の野外活動とは、自然水域（海、河川、湖沼池等）や人工的水域（プール、釣り堀等）において、水際及び水辺、水上及び水中で行われるスポーツ・レクリエーション活動の総称である。アメリカというウオーターフロント・スポーツやアクアティック・スポーツなどを含む幅広い領域にわたる諸活動である」と定義している。

北米でも、水を使ったり水辺の活動ということで、水上活動 (Aquatics)、水辺諸活動 (Waterfront activities)、水のスポーツ (Water sports, Water based sports)、海のス

ポーツ(Marine sports)等色々な言葉が使われている。

#### IV キャンプにおける水辺活動の種類

我が国で出版されているキャンプ、野外活動の書物21冊から拾い出すと、以下のような種目がある。

川下り、源流体験、歩き方—溪流・滝、水辺ゲーム—森林浴・鯉の滝のぼり、自然観察—夜の磯の生物、海での採集活動、スポーツフィッシング、海水浴、スキndaイビング、スクーバダイビング、飛び込み、救助法プログラム、ヨット、ボードセイリング(ウインドサーフィン)、カヌー、ボートと水辺活動、水上プログラム(水泳、ヨット、カッター等)、カヌーツーリング、移動キャンプ・カヌー、たらい船と海中観察、カッター、マリンスポーツ、ウオータースポーツ、水上活動、水浴の25種目がある。

アメリカキャンプ協会が発行している"Basic Camp Management"の"Aquatic"のリソースリストを見ると、"U.S.Coast Guard Regulations"等法律に関する物2冊、"Life Guard Training","Water Safety"に関する物4冊、"Canoeing and Kayaking","Guide to Canoe Camping"等カヌーやカヤックに関する物8冊、"Basic Boating","Sailing as a Second Language"等ボートやヨットに関する物7冊、"The Science of Swimming","The New Science of Skin and Scuba Diving"等水泳やスキndaイビング・スクーバダイビングに関する物4冊、"How Safe is Your Waterfront"とウオーターフロント全般に関する物1冊であった。

我が国の傾向を見ると、古い書物には山を中心とした物が多く水辺活動は少ないが、最近の書物に各種の水辺活動が現れてきている。一方北米では、古くからカヌーやヨットの記述がある。考えられることは、キャンプ場のフィールドの違いであろう。北米では、湖沼池が数多くあり、川も大きな川がゆったりと流れていて、どこでもキャンプが可能で、水辺活動の可能性はとても大きい。この基本的な条件の違いが、キャンプにおける水辺活動の普及、発展に影響していると考えられる。

#### V 水辺活動の価値

「水辺野外活動」(前出)によれば、水辺活動により開発と啓発される人的資源として、水中における安全能力の確認と獲得、自然を読む能力の開発、創造性、人間性の陶冶、社会性の陶冶、の5つをあげている。ここではこの5つが、水辺活動を行う価値と考えられる。

キャンプにおける水辺活動の活用を取り上げている最近の文献では、「現代のエスプリ334 キャンプ」1995、の「マリンスポーツの活用」酒井哲雄がある。酒井はここで、1マリンスポーツとアウトドア活動—ウオータースポーツの再発見、2ウオータースポーツとは—その分類と内容、3キャンプでのウオータースポーツの特色と価値、4キャンプにおけるウオータースポーツの導入と問題点、に分けて論じ、まとめとして「総じてキャンププログラムを立案するとき、ウオータースポーツを導入することは、単なる楽しみに加えて、キャンププログラムの学習性とフレッシュで生の情報を集積し、分析し、自己のものとして新しい知的生産性と創造性を、キャンパーにもたらしものである」と締めくくっている。酒井は、活動空間、活動展開の領域を、海上・海面・海中・海底におけるもの全てを「ウオータースポーツ・レクリエーション」(略してウオータースポーツ)と呼び、キャンプにおけるウオータースポーツの価値を、セイリング種目のヨットを例にして次のように述べている。「セイリングといっても、ただ楽しくセイリングするだけでなく、現代の青少年にとって大切な社会性のトレーニング・自己訓練(デイシイプリン)・親水

性を通じての自然の価値ある実体験などを内包しているものである。、、、また、海上での身体活動であるが故に、オゾンをいっぱいを含んだ空間での活動で、心身のリフレッシュの上に、さらに健康増進の一助となる価値も見逃すことはできない」と、社会性の育成、自己訓練、水を通しての自然の実体験、健康増進をあげている。

キャンププログラムに何を導入するかは、主催する団体がキャンプの目的を何に置くかによる。また、水辺活動をプログラムに導入するためには、キャンプ場の自然環境との関係が極めて大きい。設備・備品・用具と指導者の、質と量も大きく影響するし、キャンパーの年齢・体力・ニーズを知ること大切である。色々難しい条件はあるが、それらを乗り越えて実施するだけの価値が水辺活動にある。

キャンプにおける水辺活動の価値の一番目は、「自然を知る」ことだ。時々刻々変化する自然条件に対応して、プログラムを変えていかねばならない。気象（風向・風速・気温など）、海象（波浪・潮汐・潮流・水温・静穏度など）を知らなければ、水を使う活動はすぐ事故に結びつく。ヨットを走らせているときに、風は息をしているように変化しているし潮も流れている。この変化に対応する必要性が、水辺活動の価値と深さとも言える。また、イルカ達が併走することもある。海には国境がないし、海は地球上の生物の共通の財産だと認識する。海の生物の生態を知れば知るほど、自然との対話を充実することができる。環境に対する気付きも自然を知る中で生まれてくる。自然界の水は、絶えず動いているので力がある。川の流れ、寄せては返す波の音など、人間の精神の浄化と再生する力があるようだ。

二番目は、「自己保全能力を高める」ことだ。野外活動の安全の基本は、「自分の命は自分で守る」ことだが、自然の生きた水での活動は生き抜く力を高めるのに効果がある。殆どのキャンプで行われる水泳は、水辺活動の導入プログラムとして大切である。生きた水（流れや波など自然界で動いている水）での水泳は、必ず体験させたい。さらに、ライフセービングの知識と技術も身につける必要がある。

三番目は、「技能・技術を高める」ことだ。シーマンシップとは、自給自足して荒天を乗り切ることで、最も広い意味では、あらゆる種類の状況及び、あらゆる天候条件下で、ボートを楽しみ、これを安全に扱うことである。立派なシーマンとは、基本的には船の取り扱いと操舵の原則とテクニックをマスターし、新しい技術の習得を続けながら、船上で自信を持って自給自足できるようになっていける人である。水辺活動で、ヨット、ボートなど用具を使用する活動は、シーマンシップを身につけるよう目指したい。

四番目は、「人間性を高める」ことだ。水辺活動でヨットを操船している時、船の上では自分自身で決断をし、方向を決めヨットを進めなければならない。頼るものがない中で、自主性・自立性が養われ、準備の段階や活動を進める中で、協力や協同の社会性も獲得できる

また、朝もやの立ちこめる湖面、水平線に沈む夕日、絶えず流れ落ちる滝など自然が作り出す風景は、美しさ、大きさ、神秘性などを与え、気持ちや感性を豊かにしてくれる。

キャンプは宿泊を伴い、ある期間活動を継続することができる。活動後、仲間との話し合いの中で新たな気付きがあり、翌日のプログラムで試し新しい発見をするなど、活動の継続性が知識や技術の向上に役立つことが多いのも特徴である。

## VI 今後の課題

前述したように、水辺活動は幅広く多様な活動なので、野外活動の中でもその価値は高い。しかし、自然の影響をもろに受けること、施設・備品・用具に費用がかかること、養成できる

場所も限られていることなどから、指導者の養成には、時間と費用がかかる。ここでは、指導者の養成と、活動場所の開発の二つを課題として考える。

1 指導者の養成 北米では、アクアティックプログラムの施設と人材には厳しい基準がある。年齢21歳以上で、少なくともアクアティックエリアの監督管理を1シーズン以上経験し、さらに、アメリカ赤十字のライフガードトレーニング修了又は水上安全法指導員、ボーイスカウトのアクアティックインストラクター、YMCA水泳指導者資格のいずれかを持つことが要求されている。アクアティックディレクターは、アクアティックスタッフを訓練、監督管理し、アクアティック環境の危険性や事故の可能性について十分認識していることが求められている。水泳プログラムは、ライフガードが必要なので、赤十字、YMCA、ボーイスカウト、ロイヤルライフセービング協会のいずれかのライフガード資格が要求されている。アクアティックスタッフの1名は、赤十字救急法及び心肺蘇生法の資格を持たねばならない。キャンプディレクターはアクアティックスーパーバイザーと一緒に、アクアティックプログラムの方針を立て、活動や活動場所を常時検討研究する必要がある。

我が国でも、キャンプの安全に関する資格を明らかにし、養成を進めなければいけない。又、ヨットやボートの指導者も、我が国では競技出身の指導者に偏っているが、キャンププログラムとして、初心者に楽しく幅広く指導できる指導者の養成が望まれている。

2 活動場所の開発 わが国は海に囲まれており、海岸線の延長は3万4千km余りあり、水辺活動の場としての海に恵まれている。ただ厳しい条件の水域もあり、海があるといてすぐ水辺活動が出来るといってもいいものでもない。学校を中心としたプールの普及は、泳げない人を減らしたが、生きた水での泳ぎや海での遊びを少なくしてしまった。周辺にある海岸や河川を、水辺活動の場所として取り戻す努力が求められている。まずは、学校の授業で、地域の子供会の活動で、海や川、湖沼池に出かけ、楽しいプログラムを始めることだ。

## Ⅶ おわりに

我々は、水辺活動を通して、自然現象と関わり、自然について認識を広げ深めることが大切である。どの種目も、それぞれのレベルに応じて、自然を知らないと楽しく活動できないし、事故を起こしてしまう。人間も自然の一員であるという謙虚な気持ちと、自然を敬う気持ちを持つようになることが必要だろう。我が国が持つ自然条件である海岸線の長さを生かし、活用できる指導者を養成し、生きた水で楽しく活動する水辺活動を普及発展させたいものだ。

## Ⅷ 引用・参考文献

- 1) 水辺野外活動、梅田利兵衛・長谷川純三監修、ベースボールマガジン社、1984。
- 2) 現代のエスプリ334キャンプ、森井利夫編集、至文堂、1995。
- 3) 野外教育の理論と実際、森井利夫監修、東京YMCA野外教育研究所編、学文社、1996。
- 4) Basic Camp Management, Armand & Beverly Ball, American Camping Association, 1990。
- 5) 海洋スポーツと安全、柳敏晴、体力科学第45巻第2号、1996。
- 6) キャンプテキスト、日本野外教育研究会編、杏林書院、1989。
- 7) 水泳の指導、日本野外教育研究会編、杏林書院、1990。
- 8) 野外活動テキスト、日本野外教育研究会編、杏林書院、1988。
- 9) キャンプカウンセリング、A.V. ミッチェル、I.B. クロフオード共著、ベースボールマガジン社、1966。
- 10) The Annapolis Book of SEAMANSHIP, John Rousmaniere, 鯨書房、1989。
- 11) 臨海学校の企画と運営、日本体育大学水泳運動学研究室編、遊戯社、1987。